

研究ノート

日韓併合期・日本人は何を考えていたか③

鄭 大均 (東京都立大学名誉教授)

第二章 街を歩き、野山を駆けめぐる

日本統治期に多くの日本人は日本人街で暮らし、日本語や日本文化の垣根の内でも暮らしていた。とはいえ、日本人街で暮らしていても朝鮮人に出会い、友情や協力が形成される機会はある。物売りや御用聞きが家を訪ねてくることもあったし、普通学校の教師や警察官には朝鮮人の同僚がいたのだから、彼らを自宅に招いて食事をするとか、酒を飲むということもできた。道や市の役人であるとか郵便局や鉄道で働く者の状況も似通ったものであろう。少数ではあるが、朝鮮の人や文化に強い関心や好奇心を示す日本人もいた。

だから日本統治期の日本人の朝鮮体験といっても実は多様なのだが、この章では旅行者の紀行文も含めて、朝鮮の町や野山を歩いたことが記されているエッセイや日記をとりあげ、人々の意識や思考や生き心地の一端を追体験してみたい。

昆虫採集の一校生

いちかわさんき
市河三喜 (1886～1970) は東京帝国大学英文科の教授となった最初の日本人であり、日本の英語学の礎を築いた人であるが、この人に「済州島紀行」(『昆虫・言葉・国民性』研究社、1939年所収)という作品がある。市河は第一高等学校在学時の1905年にスタンフォード大学出身のマルコム・アンダーソン (Malcolm P. Anderson) という米国人標本採集家に誘われて済州島での採集活動に従事する。アンダーソンはロンドン動物学協会と大英博物館から派遣された標本採集家で、採集活動は「日本、支那、朝鮮、南洋」地域を対象にするものであったが、市河はその済州島の40日間の行程に参加していたのである。

「済州島紀行」はそのときの記録を日記風に記したもので、採集旅行の翌年、市河が旧制中学の時代に友人たちと発刊した「博物之友」に掲載され、やがて30余年後、市河自身の著書『昆虫・言葉・国民性』に収録される。20世紀初頭の済州島の地誌や昆虫採集の記録としても、日本人少年の異文化体験としても大変興味深い作品である。ここでの引用は朝鮮本土の木浦から小舟に乗って済州島に到着した日の記述から始めたい。なお、旅には朝鮮の地で日本語通弁 (通訳) として雇用されることになった金龍水も加わっている。文中にある「ア氏」とはアンダーソンを、「金」とは金龍水を指す。

八月八日。(略) 済州島には港という港が無い。海岸は水浅くして、大船を停泊する事が出来ず、我々の船でさえ、岸を距^{へだ}てる遠くの沖合に停るのである。浪が高いので、

陸から舢舨はしげぶねが来ない。やむを得ず船に付いてた小舟を下ろして、三人それに乗って上陸した。海岸は一带に磊々たる岩石より成っておる。上陸すると間もなく船の酔いも去った。それと同時に空腹が襲って来たので、早速パンとジャムを出して、海岸の石塊の上に坐って、やり始めた。洋人の存在それ自身でさえ、すでに多数の観客を引き寄するに充分であるのに、それが食事をしているのだからたまらない。たちまちの中に老若男女、百を以て数うる程の群衆がやって来た。払えば来るで、どうも仕方が無い。我々はここに好個の見世物となりおわたたのである。パンとジャム、彼らの眼には如何に映じたであろう。兎角とがくする中に、船から我々の荷物もやって来たので、これを数人の支機チギ〔背負子〕に持たし、濟州域内に入る。これ昔時耽羅国の王都、今の濟州島の首都であって、繞らすに高さ二丈五尺ばかりの石壁を以てし、東南西に各樓門あり、東の門より入る道路は幅一間半ばかり、これが濟州島首府の一等道路、両側には例の豚小屋然たる家屋が軒を並べておる。行く事一町にして、右に我々の泊まるべき旅館がある。濟州島唯一の旅館である、といえ大そうだが、実は豚小屋同然の韓屋で、中に二畳敷ばかりの広さの一室がある。ここへ旅客を泊めるので、大塚という雜貨商がやっているのである。序に記しておくが、この島には日本造りの家は一軒もない。在留の日本人は、全島で僅かに三十戸ばかりだけれども、皆韓屋を借りて住んでいる。郵便局も警察署もみな朝鮮家屋である。

十日。(晴天)六時半起床。早々顔を洗うて、人夫の賃金を定めるべく警察署へ行った。集まり来たれる十数人の人夫、いずれも獐悪なる面相の者ばかり。初め彼らは一人八百丈(一円六十銭)を請求したが、種々談判の末、域内を距てる三里半ばかりの処にある菱花洞メハドンという村迄、五百丈(一円)で行くことにし三人を備やとった。無論我々の荷物は多くして、到底三人の人夫を以て、運び切る訳には行かないけれど、法外なる値を払うて、多くを備う事の不得策なるを思い、差し当たり極めて必要な物だけを持ち行き、その他は追って自身取りに来る事にした。金は釜山にて求めたるメリケン粉一俵かたを擔い、余は余の寝具たる毛布数枚を、ア氏は自分と金と二人分の毛布を背負い、三人の人夫を先に立てて、愈々漢羅山〔漢拏山〕に向けて出発したのは午前十時頃。南門に至る数町の間、幾多の韓人はこの珍しき光景を眺めんが為に、四方より集い来たったのである。道は幅広く平坦であるけれども、岩石多くして頗る歩き憎い。余は足袋せんそく跣足で、手には嘗て富士登山おりの折用いた金剛杖をついていったのである。

10日の日の記述には濟州島にかつてあった耽羅国の始祖の伝説が語られ、この島が産する馬の話が語られるが、濟州島人は本土の朝鮮人よりもむしろ日本人に類似していると言う。

今その我国人に類似する点の二、三を挙げれば、(一)女子が荷を運ぶにあたり、本土人の如く頭上に戴いただかずして、背に負う事、(二)女子の顔、貌を包蔽する事なく、内外の出入り自由なる事、(三)一般の女子活発にして、本土の如く陰鬱軟弱ならざる事、(四)人情本土より乱暴にして、鬭争を好む事、(五)本土人の如く胡椒を愛喫せず、食事は冷飯をも顧みざる事、その外子細に検すれば、なお類似の点多々あるであろう。殊に該島における日本人の勢力の大なる事、及び中には日本の所属たるを希う者も、

少なからずある等の事を思えば、人、称して朝鮮に於ける日本鳴きというも、また故なきにあらずである。

10日の記述はかなり長文で、多くは島のエコロジーを語るものである。

道路の両側は一面に畑で、石壁を以て区画してある。石壁は高三、四尺で、皆熔岩をもって築いたものである。畑を区画するに石壁を以てする事は、マーク・トウエーンのインノセンツ・アプロードという書に、アフリカの西岸にあるアゾーアーズ島(Azores)においても、矢張り同様な事を記載してあったのを想起して、面白く感じた。畑には折々農夫が草をむしっておるのや、或いは牛に引かせて耕しつつあるのを見た。朝鮮人は元来肥料を施す事を知らず、また至って無精であるが為に、多く手を入れる事をしない故、大概の処は、雑草の生ずるに任せ、島民の常食たる粟の如きも、その穂はネコジャラシ位しか生長しない。(略)

道は益々悪くなり、大小の石塊を一面に敷詰めた様で、その上に水の溜っておる処もあった。後で聞けば、この島には川という川がない。為に雨が降ると、水は道路を流れて道路が突然川の如くになり、大雨の時などには、両側の石壁を崩し、かく多くの石塊を堆積せしむるのであるそうだ。(略)程なく菱花洞である。この村は人家七、八軒より成り、森林帯へはまだ十数町離れておる。この付近にてテントを張るに適した場所を求めたけれど、見当たらなかつたので、やむなく人家を距たる二、三町の野原のただ中に露営する事にした。岩陰に石塊もて竈を築き、火を起こして飯を焚いた。岩上に腰掛け罐詰の肉にて晚餐を認む。食事の終わった時、日ははや全く暮れておつた。それよりテント内の荊棘を刈除し、羊歯、ヨモギの如き軟らかなる草を幾重にも敷いて、その上に地の湿気を防ぐ為、橙油布を広げ、毛布にくるまって眠りに就いた。時に十時。

この後3人は「韓人」の勧めで居所を菱花洞に移す。「その不潔汚穢の有様」は実見しない者には想像し難いだろうと記されているが、雨が続き、金龍水が体調を壊す。

十四日。(曇)時々雨、時々晴。濡物を干す。ほど近き所にある深き谷に下りて薪を拾った。この溪は平時はいと清らかなる細流が流れておるが、一度雨振る時は濁水滔々と漲り、雨歇めば、また直に旧に復するのである。金今日少しく発熱し気分宜しからず。

十八日。(晴)(略)金、病勢益々悪く眼色変わり大いに下痢し呼吸迫しく、一時は殆ど人事不省に陥った。熱も高く時々譫語を言う。何の病か知らぬけれど、兎に角雨に打たれ、湿潤の地に寝た等の事が、慥かに原因であるに違いない。余は甚だ心細く感じた。幾那塩を飲ませ、また彼の為にビーフのエックスでスープを作ってやった。午後三人の韓人が数人の従者を連れて我等を訪問に来た。金は病気で通弁が出来ぬので筆談をやった。所が偶然にもその一人が医者であったので、直に金の病気を見て貰った。彼らは我等のかかる僻処に不自由の生活を送れるに同情して、鶏二首と卵二十個とを贈られた。仲々親切なものである。余は彼らの成熟せる漢文に較べて、自己の漢字の素養に乏しきを愧じた。

十九日。(雨) 今朝金に代わって米を磨ぎ飯を焚いた。過って釜を転覆する事二度、大分飯を減らした。昨日貰った卵をあげ、鶏を料理して食す。昨日の医師、使いの者に二包の漢薬を持って来させた。例の草根木皮で、何時調整したのか知らぬが、黴が生えておる。これを煎じて金に飲ませた。雨の為屋内所々洩り、薪を悉く皆濡らしてしまった。

二十日。(雲)、近家の者、金が病気になるを知って、親切にも薪を持って来て呉れた。

採集活動は続けられる。アンダーソンは鼠を捕るために山上にワナをかけ、毎朝とりに行くが、鼠がかかっている、他の鼠にやられたりして完全な標本を得ることがなかなかできない。一方の市河も朽木でムカデ類の採集をしたりする。金は回復するが、今度は強靱な肉体の持ち主と思われたアンダーソンが体調を崩してしまう。濟州島到着以来、雨をもものともせず戸外で仕事を続けたのが祟ったらしい。市河の日記にはこの頃、島民たちの間に「洋鬼山に入りしが為に、山靈怒って風雨を起こし給うた」の流言が広がっていることを伝える記述もある。体力に自信のなかった自分が恙なきを得たのは不思議な気持ちがあるという記述もある。しかしやがてアンダーソンも健康を回復。山嶺に棲息する鹿を打つためにライフルと食糧を持参、某所にテントを張る。市河の方はロビンソン・クルーソーを読んだり、金から朝鮮語を学んだりするが、濟州島に来てはや一月になるというのに、未だ漢拏山に登頂していないことを遺憾に思う。

九月十三日。(晴) 渡島してよりはや一月余になるが、我々は未だ一度も漢羅山頂を極むるの機会を獲なかった。これは一つは天候の続いて不順なりし事と、一つは頂上に達する道路の不明なる故であるが、しかし折角濟州島へ来て漢羅山山頂を極めずとあっては話にならぬと思ひ、菱花洞村民の中より案内を雇わんとて、金をしてその交渉に当たらしめたところ、彼らはみな懶惰怠慢にして、一人の起ってこれに応ずる者がない。彼らは曰く「この寒いのに御山の頂上へ行きや、凍え死んで仕舞う」と。嗚呼遊惰の民よ。非活動的の民よ。彼らは起って働かんよりも、寧ろ汚穢なる陋屋に蟄居して、喫煙賭博に貴重光陰を消費し、惰眠惰食豚の如き生涯を送るを以て、人生最上の幸福なりと考えておる。案内者既に得るに由なきゆえ、余はやむなく金と二人で登山を果さんと決し、晴天の到るを待った。幸い今日はこの目的を果たすにはこの上もなき好天気、早々支度を終えて八時出発。(略) 我々は山頂を望みつつ、尺余の笹を踏み分けて進んだ。この原は七合目の辺より、八合五勺程のところまで拡がり、中に一本の樹もない。茫茫たる笹原で、麓からもこの部分はよく見える。(略) この原が盡きると、少し降路になって谷に下りる。ここにア氏のテントが張ってあったが、氏は不在。傍を流れる溪流に喝を医す。清き事宛ら氷のよう。ここより牛馬の拵えた途が数条あるが、余等は溪に沿って上る。間もなくア氏に遇った。氏は今朝三時、月入らぬ先に起きて山頂へ鹿狩りに出懸けたのであるが、ただ山中に足跡と糞とを見たるのみで、得る所なく引き返したのである。ア氏に別れて我等はその途を溪の盡くる所まで行き、ここで左に上り、更に右に向かうた。(略) 道は全く絶えて枝は地上一尺位より密に茂り、容易に潜って行く事も叶わぬ様に見えた。けれど絶頂へ行くには、是非これを潜って通らなければならぬ。余は携帯品を残らずとある岩陰に置いて、身を軽くし、四つ這いに

なって金に随^{したが}って森の中へ入った。こんな所でも牛馬が往復すると見えて、糞が落ちている。その糞について行くと、幾らか楽だ。時々木の疎^{まぼ}らな処で、踵^{かかと}を伸ばして息む。何の事は無い。鍾乳洞へ這入った時のようだ。一時間位で眼前^{にわ}俄かに開けたかと思うと、早頂上に出た。時に十一時。足下には火山湖が千古の碧^{あお}を湛え、火口壁には数頭の牛馬が静かに草を喰っている。この光景を見ては、覚え^{かいさい}ず快哉^{かいさい}を叫ぶを禁じ得なかつた。噴火口は径四丁余、その東北隅に池あり。龍池と称^{たた}え、周囲一町半、鬼神棲むと言^{きしん}い伝えられておる。余と金とはここで泳いだ。「寒くて凍え死んでしまう」という頂上の、而も鬼^{しか}の棲むという池の中で泳いだのである。この池ではガムシの一種を捕まえる。偕岸に上がって、草の上に坐って麵包を食った。(略)

一時下山の途に就いた。例の林洞を通り抜けて、二時十五分ア氏のキャンプに着し、ここで清流^{きく}を掬^{きく}しつつ握り飯を平らげ、二時半出発四時テントに帰る。斯くて愉快なる一日は終わった。城内より山頂迄は凡そ六里もあろう。一日で昇降するのはチト六ヶしい。今宵は十五夜、余は日中の疲労も忘れて、金と共に遅く迄林間に月を賞し、遠く故郷の事など思い出で、ホームスイートホームを吟じて、金にその意味を説明してやった。彼は二十一歳の青年で、朝鮮人にしては中々わかった人間である。彼は地球の円い事を知って居る。彼はまた日本、支那、■羅(解字不能)、イギリス、ドイツ、フランス、アメリカ等の諸国の存在する事を知っておる。またどこから聞きかじったか知らないが、米国に南北戦争のある事をも知っておった。しかしながらフランクリン、ワシントンなどはその名すらも知っておらない。彼の如きは朝鮮人にしては物知りの方で、濟州島民などは無智蒙昧驚くばかりで、嘗てある日本人がこの島の中流社会の人に「日本にも月はありますか」と聞かれて、答える術を知らなかったという話がある。

市河三喜は金龍水を評して「朝鮮人にしては中々わかった人間である」という。これは韓国人読者をやや失望させるものだろうか。しかし日誌全体を読んだ印象でいうと、市河はアンダーソンよりもむしろ金と長い時間を過ごしており、親しくなっているようにも見える。とはいえ、「濟州島紀行」は何よりも昆虫採集の記録として書かれたものであり、濟州島で出会った人間についての記述もある。なかでも詳しく記されているのは濟州島牧使・趙鐘桓との面談である。市河は牧使を「その威勢の堂々たる、わが国往時の大名にも劣らない」と記している。1905年9月22日の日記である。これは統監府による大韓帝国への保護政治が始まった頃の辺境の地・濟州島で起きた小さなできごとの記録である。

九月二十二日。(晴)余は今朝郵便局長加藤氏、警部吉武氏と共に一人の通弁を連れて牧使を訪問した。牧使は濟州全島を統括し、行政司法の全権を握り、その威勢^{あがな}の堂々たる、わが国往時の大名にも劣らない。牧使の俸給は一ヶ年二千元で、この官を購うには数万円を政府に納めなければならない。しかしながら彼は他の地方官と同じく、任地の富豪より金^{しほ}を擡^{しほ}り挙げるの術を知っておるが故に、かくの如き大金を出してその職を買うも、期年ならずしてその元金を収得する事が出来る。韓人の諺に「府使の職に在ること三年ならば、子孫三代寝て暮らす事を得」とあるが、以て暴斂^{ぼうれん}の状、察すべしである。現任の牧使は趙鐘桓といって去年三月頃この地に来た。大の日本好きで日本人にとっては甚だ都合が宜しい。彼の前に牧使だったのは、かの金玉均を上海に殺し

た洪鐘宇で、彼の時には日本人も余り勢力を振るう事が出来なかった。牧使の邸宅は殆ど市の中央に位置しておる。三個の門を通って行くと、左手に大きな建物があって、これが応接室、広大ではあるが少しも飾りなく、正面には「延曦閣」という額が掲げてある。牧使は知命に近き半白の老人で、鼈甲縁の黒眼鏡を掛けておった。彼は先ず余の年齢学校等を尋ね、「山上の生活は嘸苦痛なりしならん。年少の身をもって、四十余日かかる苦痛に堪えたるは、意気真に壯とすべし」など言うた。会談一時間半、ビールと柑橘の茶とを饗応され、十一時半別れを告げて帰る。門内に裁判所あり。その中庭で二人の罪人が四肢を板に縛り付けられ、牧使の下人に咎もて臀部をひっぱたかれ、臀を動かしつつ悲鳴の聲を挙げているのを見た。その状、真に残酷である。

それより加藤氏の許にて、氏が余の為に一里隔たりたる別刀浦〔禾北浦〕よりわざわざ取寄せたる甘薯を御馳走になった。甘薯は四、五年前飛揚島在留の本邦人が、長崎県より多数の種を購入し来って、島民にその栽培法を教えたのに始まり、今日では殆ど全島に伝播して、常食として用いる者も多きに至った。午後近所に散歩して、洪辰亭、泳恩亭（牧使が年に一回水を浴びるといふ所）等を見物す。（略）晩、大塚と共に牧使の邸内にある監獄を見に行つた。カンテラの光薄暗き四坪ばかりの部屋に、四、五人の囚徒が首枷を嵌めて蹲っておる。今朝咎で打たれた二人もこの中におるのだ。

アンダーソンの採集旅行は学界に幾多の未発見の新種を提供し、市河もそれに貢献した。ところがそのアンダーソンは第一次大戦中、カリフォルニア州オークランドの造船所での労働奉仕に従事しているときに足場からの墜落事故で不運の死を遂げる。享年41歳。1939年版の著書の付記には「真面目で熱心な、正義を愛し意思の強い地味な性格の持主であったのに惜しい事をした。スタンフォード〔大学〕へ招かれた時もまたその後スタンフォードから学者が来た時も、いつも彼の噂をしてはその夭折を惜しんだのであった」と記されてある。

原象一郎の授業参観

法制局参事官の原象一郎（1882年生）は1914年夏、調査研究のため朝鮮を訪れ50日間に亘って朝鮮各地を視察する。『朝鮮の旅』はその原が残した日記風のレポートである。同年7月13日、釜山に到着した原は翌日には京城に移動し、それから地方視察に出掛けるまでの二週間ほどを総督府での調査研究に従事するが、ときには行政機関や教育機関を見学したり、街を歩いたりすることもある。7月18日の日記には次のようにある。

午前は例の如く総督府へ行き、午後は役人の所へ行ってある事項を研究した。帰つて来ると疲労が著しい。一体この頃の暑さは酷い。日中は室内でも九十度〔摂氏32・2度〕以上であるが、ただ雨期であるにも拘わらず余り蒸さないから内地に比して却って凌ぎやすい様な気がする。殊に夜はゾッと温度が下がるから良い。晩涼を追って南から北に向かう。二つばかり電車を横切つて行くと、パゴダとかいう塔のある甚だ小さな公園に来る。色々の草木や灌木の様なもの植えてあってやや体を具えて微なるものである。音楽堂のようなものもある。これを通り抜けて行くと、純然たる朝鮮人の部落

に入る。家の陋苦^{むさくる}しいことは甚だしいものである。もとより日本の家屋といえども、欧米の家屋に比較すれば随分小さいものであって自慢にも何にもならぬであろうが、朝鮮の家屋を見ると、これはまた別段に貧弱矮小なるものである。良い家でも内房といって女房がいる部屋迄入れて、小さな部屋が三間位しか無かろう。庭は殆ど絶対に無いといってよかろう。従って青いものの無いのは勿論である。ただ田舎とか町外れとかになると時々瓢^{ひさご}が低き土塀から草屋根に掛けてまとうておのみである。かくの如き状態は皆官吏の誅求^{ちゅうきゅうしゅうれん}収斂を恐れてかなり家を小さくした為であるというけれども、そればかりではあるまい。美術心が無くてかつ建築材料の少ないのも重なる原因であろうと思う(『朝鮮の旅』巖松堂書店、1917年、69～70頁)。

ここまでの記述に斬新であるとか驚かされる記述はない。平凡な旅行記であるのかなという印象を抱かせるくらいであるが、この後に原が朝鮮人の平等志向の強さを指摘する箇所があって目を見開かされる。

家屋の小さくきたないのに反して、街頭を徘徊しておる者の衣服の清素なることは驚くばかりである。皆ピンとした一点の汚れもない白色、黄色、水色の衣、殊に女は緑色、紅色の裳をも着けておる。それがみな新調の衣服を始めて着た様な具合である。しかもその様式が甚だ優美である。男は大抵平常服の上に周衣^{ツルマキ}と称する長き外衣を着て、黒冠を戴き(略)非常に高尚な紳士である。貧富貴賤の階級が衣服によっては殆ど識別がつかぬ。小使いも行路商人も一度外装して立てば立派な紳士である。衣服の点においては殆ど完全に近き社会的平等が行われておる。それが朝鮮人の気質の一端を示す様に思われる。即ち多年官憲によって虐げられておったに拘わらず、根本において平等の要求が頗る強き社会的特質を現わしておる様にも思われる。女の衣裳がまた甚だ美しい。乳の上までも足らぬ狭き上衣は仮に議論があるとしても、胸より垂れる長き裳は甚だ余韻が多い。揺々として流れている。それがみな単色の配合美しきものである。貧富の別は女についても余り判らぬが、美しき被衣^{かつぎ}を被いでいる者は多少身分が善い者ではあるまいかと思われる。(略)。要するに様式の優美と単色の調和とは朝鮮衣服の特長であって、殊に貴賤貧富の区別がないのと清潔なる点においては世界に類が無かろうということである。糞土^{ふんど}の中に生くる民としてこの事ありとは、自分は実に意外の念に堪えざる所である。女の衣物はとりわけて宜しい。綺麗にして締まりのない不格好な日本の婦人服と取り換えたならば如何に経済にしてまた如何に品格を向上せしめるであろうかなどと飛び放たれた空想に耽る(同書、72～74頁)。

日記の分量が多いため引用は断片的であるが、後続する部分にもときに観察的な記述がある。

一体朝鮮人は頗る見得^{みえ}を好むハイカラな人民で、身の回りの物には前後の考えもなく金を出して流行を追う。従って輓近風俗の変われるや驚くべきものありということである。たとえば履物の如きも在来の物に、色々優美のものや丈夫なものや古雅のものがあるに拘わらず、京城辺りでは貧乏人の末に至るまで身銭を切って盛んにハイカラ

な西洋靴を履いている。帽子も左様である。古来の権威ある冠を棄てて夕闇にもクッキリと白いパナマを帽っておる者が甚だ多い。殊に洋傘は朝鮮一体の大流行であるという。明治初年の赤毛布よりもなお酷い。山村水廓を覆うて蔓延^{はびこ}っておるという。彼らはただ漫然として指している。星落つるが如き夜に汚い婆さんが洋傘を指して歩いているのを見た。何の真似かと聞いて見たらば、被衣の代わりに指しているという。呆れ果てたる次第ではないか。自転車あんども頻りに乗って廻る。産を傾けて買うのであろうけれども別に生業上の必要に迫られてこれを用いるのではない。ただ好奇心を満足する為に無暗に乗り回すのである。かくの如くすべて身の回りの物には朝鮮人は頻りにハイカラがって贅沢をするけれども、その僻家と食物とは物に成っておらぬ。酷い陋屋^{ろうおく}に住まって酷い物を食っている変な人種である。

かつて話に聞いた通り、朝鮮人の挙動は総て呑気で不活発である。男は長い煙管を持ってブラリブラリと歩いている者もあれば、足の裏と尻の先を一直線に水平にして蹲^{しゃが}むということは日本人には殆ど出来る者がなかりろうと思われる。日本人は踵^{かかと}の上へ尻を乗せて蹲むのである。この朝鮮式の蹲み方というものは如何にも力の抜けた形である。(略)女が頭の上へ無暗に物を載せて来る。洗濯物でも水瓶でも何でも載せて来る。手放しの物が多い。驚くべきは手で持てば雑作もない様な誠に小さな箱の様な物まで頭に載せて来る(同書、76~78頁)。

「かつて話に聞いた通り、朝鮮人の挙動は総て呑気で不活発である」のような記述は常套句的だが、道端にしゃがむ朝鮮人の姿勢に向けられた視線は注目に値する。それは普通であれば、みっともない仕草として軽蔑されるか無視されてしまうのだろうが、原はその足の裏と尻の先を一直線にする姿に注目し、「日本人には殆ど出来る者がなかりろう」という。これは今日いうスクワットの姿勢であり、ヨガに励むソウルや東京の人々が極めようとする姿勢なのである。

それから二日後の7月20日、例の如く総督府で仕事を始めた原はこの日から高等普通学校が夏季休暇に入ることを耳にする。

自分は平生から朝鮮に於ける最も重要な政策は土人教育の問題であると信じておったので、兼々朝鮮へ来たなら是非学校の実情をも見たいと思っていたに拘わらず、はなはだ迂闊の次第ではあるが、(略)毎日の仕事に追われて学校の夏休みになることを知らなかった。(略)授業はなくとも責めて校舎の状態、児童の集まっている有様でも見て来ようと思って電話を掛けて聞いて見ると、既に本校の生徒は散ってしまったが、付属学校の生徒はまだいるという。直ぐに車を走らす。

学校の位置は総督府とはまるで反対の方向にある。即ち京城の北方の山の手において朝鮮人部落の中に在る。校舎は木造の質素な建物であって、門を入ると正面に存する主たる建物は朝鮮人で普通学校の教員とならんとする者を速成的に仕立てる臨時教員養成所の建物である。その右の方に当たって種々の蔬菜を栽えた小なる畑がある。短草離々として廻らず飛石の上を伝って畑の中を通って行くと、更にまた木造の小なる建物がある。これが付属普通学校である。今しも一年から四年まで全部の生徒が日蔭棚の下に整列し、何か先生の話の聞いている。愛らしいこと夥しい。みな朝鮮服で

成人と同様な様式をした周衣ツルマキを着て、制帽だけは海軍帽しょうにを戴いている。一体この「ツルマキ」即ち朝鮮の「フロックコート」は、成人に対してよりも小児に対して最も似合う。水色のものに至っては殊に優美であって、清素の感が人を悦よろこばしめる。朝鮮へ来てから今まで見る所によると朝鮮人の子供は、日本人の子供の様に始めから私の張った小ましゃくれた野卑な顔をしているものが甚だ少ない。概して眉目清秀にして、貧家の子でも気品が高く、温良活発で聡明な顔をしている。大人とはまるで別物である。何時しか退化するのであろうが、少年時代の風貌に至っては、日本人の子供よりは余程良い様である。殊にこの高等普通学校の付属普通学校は上流の子弟が多い為か、別してその感が深い。すべて子供は教場に入る。全体七学級に別れておいて、概して単式の編成であるが、中には二学年の複式の学級も混じっておる。まず一年級の国語の授業を見る。今年の四月から収容したもので、その前から日本語を知っているものは甚だ少ないという話であるが、それにしては驚くほど日本語が達者である。日本人の子供と少しも違いがない様に思われる。もとより犬や猫に関し、また国旗等に関する簡単な会話であるが、少しも無駄な言葉がない。観念の連絡が極めて敏活巧妙であって語調に淀みがない。これは単に席に居って先生の問いささに答える場合のみならず、教壇に立ち数分間に亘って説明する場合においても些かの泥滞がない。しかして活発であって、誰を指しても少しも人に怖気おそしめするということがなく皆平然として答える。要するに言語の、明哲流暢なる点、話の秩序立っている点、態度の落ち着き払ってハキハキしておる点などはとても日本人の子供の企て及ぶ所でない(同書、80~83頁)。

「土人教育」という言葉が出てきて驚かされるが、これは「土地の人」つまりネイティブを意味するものであろう。一年級の国語の授業を参観したところであるが、その評価はほとんど称賛に近い。「観念の連絡が極めて敏活巧妙であって語調に淀みがない」などと言う。ただし原はこの子供が大人になると「何時しか退化するのであろう」と考えるらしい。原は上級生学級の方へ行く。

段々と廻りめぐって上級生の方へ行くと益々出来る。日本人の子供の比ではない様である。最後に四年生の所へ行くと、先生が参観人に何でも御随意のことをお尋ね下さいという。参観人の某代議士たなごころが試みに日本の領土の範囲について質問すると、歴々として掌を指すが如きものがある。大国の民と小国の民と何れが幸福なりや、幸福なりとせば何故に幸福なりや等の難問を如何に答えるであうかと思つて聞いておると、平然として甚だ婉曲しかに而して要領を得た答をする。有髯ゆうぜんの男子をして瞳若どうじやくたらしめる。(略) 辞令の才のみならず何様しても多少頭が無くては言えぬ。最後に世界において如何なる国があるやという質問に対しては、手を挙げたものは比較的少なかったが、ある一生徒を指すと、ヨーロッパより豪州に到るまで滔々として各国名を挙げ、また時に植民地を挙げ、而してその何れの国に属すやを説く。これは学校では少しも教えぬというから、自分で何か読んで来たに相違ない。

参観し終わって殊に不思議に感ずることは、彼らは少しも人に怖れぬということである。先生のいうところによると、如何なる貴顕大官の類が来ても平気であるという。指名せられて演壇の上に立つ有様は場馴れた演説使が悠々として壇に上るの概があり、

説明の調子がまた平然たるものである。途中で支えることがあっても少しも焦らぬ。^{おもむ}徐ろに語を続ける。これは度胸が据わっているというよりは寧ろ感情が冷ややかであって、かつ責任の観念が乏しい為ではないかと思われるが、如何なものであろうか(同書、86～88頁)。

参観し終わって原は朝鮮人の子供たちが「少しも人に怖れぬ」ということを不思議に感じる。この印象は興味深い。なぜなら今日日本人が韓国の学校を授業参観しても似たような印象を抱く可能性があると思われるからであり、それは恐らくは日本人以外にはさして印象的に語られることではないと思われるからだ。つまり「人に怖れぬ」という原の印象は、対人関係においてすぐ緊張したり、臆したりすることの多い日本人ならではの印象である可能性が高いのだが、原はそのことに気がついていない。だからそれを「度胸が据わっているというよりは寧ろ感情が冷ややかであって、かつ責任の観念が乏しい為ではないか」などと推測してしまうのである。この後、原は普通学校教師養成の学級を参観する。普通学校は朝鮮人子弟の通う小学校であり、高等普通学校は日本人の通う中学校に相当するが、原がこれから参観するのはその教師たろうとする日本人青年たちである。

校長と共に本校の高等普通学校の校舎を見廻って行くと、二階で頻りに「オルガン」の音が聞こえる。何かと聞いて見たら、これは日本人の中学卒業生を採って一年間に急速に師範教育を施し、八道[朝鮮全土]の片田舎に散らばっている朝鮮人の普通学校の先生にするのだという。それは殊勝である。是非その開拓者の状態を拝見しようといって二階に登って行くと、才気の影響は余り見えぬが、質実にして剛健らしい青年が四、五十人ばかり熱心に唱歌を教わっている。(略)校長の話によると、これらの青年は単独に深く朝鮮人の間に入って、全然朝鮮人と同様の生活を為る必要から第一、日常の生活から改めてかからねばならぬ。そこで食事も凡て朝鮮流の物を食べ習わせ大蒜等を盛んに食わせる。調理も自分でさせ、温突の如きも焚き習わせるといふ塩梅である。しかしてかくの如くにして鍛えられた先生の行く先は何処かという、それが何ともいえぬ気の毒な所が多いという。医者は固より食物も余りない、しかも時には自ら朝鮮人の子供を教えても自分の子供を入れる学校がない[朝鮮語を常用する子弟と日本語を常用とする子弟の学校は別々である]。また金もないから自分の子には結局教育を施さぬ者があるという。甚だ憐れな話である。しかしこれらの先生の任務は国家百年の政策の上より見れば最大の意味を持っているものである。(略)かくの如くにして日本人の社会的感情と朝鮮人の社会的感情とを根帯から融和して堅実なる植民地統治の基礎を造らねばならぬ。幸いにして従来の実績に徴するも、日本人の先生は朝鮮人の信頼を得ること最も夥しい。冠婚葬祭に迄も立ち入って付託を受くる者が多いということである。併合以前に地方に騒乱などのあった時には、他の部局の日本人はドシドシ殺されて終つたが、教育者にして難を被った者は一人もないということである(同書、88～90頁)。

「日本人の先生は朝鮮人の信頼を得ること最も夥しい」の文があるが、それは概ね正しいと思う。日本統治期に教育を受けた朴正熙、金大中、金泳三という三人の大統領がい

ずれも日本人恩師を称賛するということがあった。日記はこの後にも続く。7月末からはいよいよ地方視察の旅に出掛けるのだが、これ以上は引用はしない。

1909年から18年まで法制局参事官を務めた原はその後、軍需局長や国勢院第二部長を務め1920年に退官する。『朝鮮の旅』以外に朝鮮との関わりを示す履歴を見つけるはできなかったが、そういうこともあるのだろう。ただし『寺内正毅日記』(京都女子大学、1980年)の526頁にはメモのようなものが挟まれていて、朝鮮総督府長官希望者の七番目に原象一郎の名前が挙げられていて、「若シ若キ者ナレバ」の但し書きがある。京城での滞在の初日に原は寺内正毅総督の午餐に招かれ、一時間ほどを過ごし好感を抱いたということが日記に記されているが、寺内総督の方も原に好感を抱いていたらしい。

釜山郊外の風景

原象一郎が朝鮮を訪ねて6年後の1920年、南満洲鉄道の幹線で朝鮮と満洲の旅に出た歴史学者の喜田貞吉(1871~1939)は5月24日、神戸から釜山に到着。郊外の様子を見るために電車に乗り釜山の西方へと向かうが、喜田の目に朝鮮の風景は「わが平安朝から現代まで、一千余年の経過をゴッチャにした一つの大きな縮図」に見えたらしい。

旅館で一浴の後、今日の日をどう有益に費やそうかとの議が起った。まず郊外の様子をも見、新版図の温泉に内地の垢の洗い直しがよかろうとの事に決して、文庫[呉郷文庫]の一行石原・田所両君と、宿の前から電車に乗った。釜山の市街は全然内地同様の町作りだが、町外れに出ると鮮人の村落がある。平地から丘陵の半腹にかけて陋屋が密集して居る。何たる気の毒な状態であろう。内地にはむかし坂の者・野の者などという部族があった。河原者・谷の者・島の者・原の者などというのもつまり同類で、普通の都邑に住み兼ねた社会の落伍者が、都邑に近く、しかも捨てられた空間の地に小屋住居をして、都邑の人々の雑用に使役せられ、或いは漁獲物や竹細工・草履などの生産品を都邑に供給し、或いは身を遊芸に委して歴門米銭を乞い、それで働くその日その日の口を糊して行く同情すべき人々であった。(略)彼らは限られたる土地に限りなく増殖する人口を収容して、ますます貧乏のドン底に陥り、ついには所謂密集部落・細民部落等を為した。自分は今敢えてこの同情すべき新付の同胞が、彼らの徒と同じ運命にあるなどと失敬な想像をなすものではないが、その現に町外れの僻地に住んで所謂野の者をなし、丘陵の半腹に住んで坂の者の態を呈し、内地人の市街をこれら朝鮮人の村落とかあまりに著しい懸隔のあるのを見ては、わが平安朝における虐殺の結果落伍して、賤者の列に落ちこんだ人々の有様を思い起こさずには居られぬ。如何に優勝劣敗の原則に支配せられる世の中とは云え、これはあまりに悲惨である。これを救うの道はただ当路者の誘掖輔導と、鮮人自身の自覚発奮とにあるのであろう。

見たからに気の毒な感を起こさしめる様な陋屋に住んで居りながら、鮮人の服装はなかなかの気の利いた、立派なものだ。現に労働に従事して居るものの外は、大抵清潔な純白の衣服を身に纏うている。頭には朝鮮特有の冠り物の外に、パナマ帽や鳥打帽などを被っているものもある。全く風俗の混乱過度時代だ。労働者には印度人の様に布で頭をクルクル巻にして居るものもある。魏志には倭人の俗を記して、男子皆

露紵、木綿を以て頭を招すとあるのはこんなものであったかと思わしめる。

若い婦人の服装は殊に気が利いて居る。一寸外出をするにもお化粧をして、涼しそうな薄絹を頭から被り、衣服には色物を用いて如何にも気持ちのよいがある。袴を例の通り胸高にはいて、短い上衣の前を合わず紐に銀環を通して、装飾としたものを電車内で数人見受けた。この胸高の袴は支那唐代の俗を輸入したもので、本国にそれが疾くに失われても、ここにはまだそれが遺って居るのである。下級の婦女にはその袴と上衣との間から乳が露出して平気で居るのもある。これ等乗合婦人の中に一人濃厚に粉粧を施して、例の袴を胸高に締めて、だらりと垂れた上衣の紐もうつりがよく、上には純白の絹布を纏い、薄桃色薄絹を頭からかぶり、金指環の三つもはめて、絹張の蝙蝠傘を手にした一八、九歳とも見える女が、自分の立って居るのを気の毒だと思つてか、破顔微笑してその座席を分かつて呉れた。なかなか愛想がよい。はて貴族の令嬢にしては一人で電車に乗ろうとも思われず、またこのあたりにこんな立派な服装の女子の居そうな富豪らしい家も見えぬ。何たる上品な、しおらしい娘ではあろうと、後で聞いて見るとそれはカルポー(蝸蝓)という下級の売春婦であった。やはりあの陋屋に住んでいるのである。(略)朝鮮は全くわが平安朝から現代まで、一千余年の経過をゴツチャにした一つの大きな縮図だ。後ろに垂れて背に及んだ白い頭巾の女が幾人も車内に居る。額の上に縁を取って頭の後ろで縛っているところ、能楽でよく見る女にこんなものがある。これは南部に限った風俗じゃそうなる。例の長い煙管を持って煙草を吸っているものもある。見たところ如何にも昔床しい心地のする服装だが、その床しい婦人がツンと手漬をかんだのには恐縮した。男子が長い煙管を持っているのは普通だ。併しその煙管も嘗て土産に貰ったり、絵で見て想像していた程には長くない。聞けば近年だんだん短くなったのだとの事だ。男子の例の冠り物の鍔(縁)も、絵や写真で見慣れて居たものよりも遥かに狭い。怠業的民族だなどと言われる人々にも、次第に忙しい世界の風潮が押し寄せて来た結果だという。併し見た所では相変わらずの怠業的民族で、何をすともなく白衣の偉丈夫が三々五々佇立したり、逍遥したりして居るのは到る処に見受けられる。

草梁を過ぎてやがて右手の山上に日本式城郭の石塁が見える。文禄役に我軍の築いたものだ。右手の海に近い小山にもまた日本式の城堡がある。所謂釜山鎮の城墟だ。これは帰路に踏査する積りにして素通りした。畠中の小道を小娘が数人水甕を戴いて列をなして電車道の方へ歩いて来る。水甕には一つずつ大きな瓢箪を浮かべている。野中の清水から飲料水を汲んで帰る所だ。瓢箪は即ちヒサゴで、内地ではそれをヒシャクと訛り、木や竹で作って、柄杓などと似合った文字にも書いているが、朝鮮ではやはり原始のままの瓢が今も用いられているのだ。一事が万事この行き方で、朝鮮ではどうしてもわが一千余年間の変遷の縮図だ。頭に戴くのは水甕ばかりでない。一切のもの皆頭上に載せ、糞尿の桶までも戴いて平気だという。内地では有名な八瀬女・大原女を始めとして、京都付近の村落の女に今も頭上に物を戴く習慣が遺っている。海岸部落の女にも往々それが見られるが、古い絵巻物や埴輪などを見ると、下様の婦女の間には昔は一般にこの風があったらしい。而して朝鮮には現にそれが一般に行われているのである。

女子が頭上に物を戴くのに対し男子は背に物を負う。何でもかでもチゲという物に

縛りつけて背負うのだ。チゲとは二本の堅木を椅子の様に横木で連絡せしめて、その二本の堅木の下部に各一本ずつの腕を出し、堅木にはそれぞれ紐をつけて左右の腕に通し、前から肩にかける様に作ったものである。先刻釜山の埠頭に上がった時に、荷物を持たせて呉れると五月蠅く付け纏った立ちん坊が負っていたのはこれであった。併し彼等は内地の立ちん坊とは違って、用のない時はそのチゲを下に置いて早速腰掛に応用し、腰から例の長い煙管を抜いてスパスパと煙を吹かす。椅子携帯の立ちん坊だ（『庚申鮮満旅行日誌』『民族と歴史』第六巻第一号、1921年七月）。

浅川巧の日記

1914年朝鮮に渡った浅川巧（^{あさかわたくみ}1891～1931）は林業試験所に勤務、養苗や造林研究に従事するとともに朝鮮の陶磁器や工芸品の調査・研究を行った人であり、また朝鮮において良き隣人たろうとした浅川は普通の日本人が味わうことのなかった異文化体験を経験した人でもあるが、ここではよく歩いた日の日記（『浅川巧 日記と書簡』草風館、2003年）を紹介したい。

浅川は妻のみつえが亡くなった翌年の1922年1月から一年半ほどの間、日記をつけていたが、よく歩いた日というのは陶器の破片拾いのために古い窯跡周辺を歩いた日のことである。浅川の日記からの引用はこの後にもあるが、これは特別な感性や精神を備えた人の日記であるから貴重である。引用は日記を単行本化した高崎宗司氏による誤字修正等に準拠して行いたい、旧仮名づかいを新仮名づかいに改める等、読みやすさを考えて若干の修正を加えた。

四月二十八日 晴れてむし暑い日だった。

朝五時半頃起きて宿のものを起こした。（略）今日は樹物採集と砂防造林の実況視察の目的で北漢山へ行くのだ。人夫三人と高木君〔林業試験場の同僚〕と僕と五人。月谷から加五里に出て山に入った。牛耳洞の桜も散った後だった。牛耳洞から数町の奥の沢に臨んだ斜面に高麗焼の窯跡を見つけた。喜んで破片を集めていたら人夫が来て、そんなものならこの上の方に沢山あると教えて呉れた。行って見たらなるほど沢山あった。そこが真の窯跡で最初の処は仕事場らしかった。最初のところからは乳棒の様なものや変な格好の破片が発見された。窯跡の隣に更に素焼の窯跡があった。焼いたものは青磁と簡単な象嵌もので、随分美しい色も出ていた。道洗寺で昼食をして白雲台に登った。往十里から来た五人の婦人が同じく登ったのを見て感心した。婦人の一行は四十五が一番若くて、老いたのは六十二になるという人達であるのにこの険を冒すとはただ呆れる外ない。この山は頂上に近い処が険しくて険しくて、絶険というよりも寧ろ危険のところだ。日本で僕の登った八ヶ岳、金峰山などの比でない。日本アルプスの山中に育った高木君すら驚いていた。峯の岩上には僅かの土層があってライラックやシモツケの種類が一面に生えていた。問題の岩レンギョウも掘った。今まで冠岳山のみで採った。白花のカラタエウツギも採ったし、野花も色々採った。

登山すると身も心も清々する。頂上で送った十数分は独りでに祈りの心だった。また特に危険の道を通った二、三分の間は実に何物をも忘れて岩に唯しがみついで過ぎた。

朝鮮の老婦人等の勇敢なものには感心する。寺詣りをして尊い仏像の前に躓くよりは、この岩上を歩かせられた方が多くの人には真剣になるだろうと思ったりした。

帰途は山の上腹を一周して再び道洗寺に下りた。加五里に近い山麓で朝見た窯跡と同じ様の窯跡を発見した。五人連の婦人達は後になり先になりして清涼里の近くまで同じ道に来て別れた。家に着いたのは八時頃だった。随分つかれた。夜、点釧〔親しかった同居人〕が来たが話しもしたくなかった。何処に行ったか分からんというて心配していた宿の女将が夜晩く戻って来て今日の始末を物語った。それは僕の出発する時、宿の十五になる倅が親爺にせっかんされていた。そのせっかんが残酷で実に未だかつて見たことのない乱暴さであった。原因は子供が親の言もきかず学校へ行くというて活動写真へ行ったり、金をごまかして酒屋へ遊びに行ったりしたそう。小僧もよくない。この子供は僕の不在中に部屋を荒らして色々のものを持ち出したりしている。然し親爺の打ち方もひどい。長三尺ばかりの雑木の棒がこなごなに叩き折れてしまった。僕が止めたので漸く廃めて口でゆっくり話すことになった。老婆や他人が止めてもどんどん突き飛ばして叩いた。静まったので僕は出発したのだが、そのうちにまた以前よりも一層はげしく叩いて耳や口から血を流した程だったそう。この子は妾の子だが、本妻に子がなくて実子同様育てて、去年妾が死んだから尚更本妻になついている。同じ家にいてさえ、僕今日まで本妻の子とばかり思っていた。本妻が子供に代わって極力詫びても親爺がなかなかきかない。そのみか本妻にくってかかるので、見てもいられず、止めも出来ずに家を逃げ出したものらしい。戻った時の女将はヒステリーがつのって弱っていた。僕疲れて慰める力もなかったが、話ししている間にやや元気づいて終わりには晴々した笑い方もした。

朝早く出掛け、帰宅するまでの文は旅行者の紀行文のように。何かしらの発見のあって愉快な一日である。先に原象一郎が朝鮮の子供に感心したように、浅川は朝鮮の婦人たちの登山ぶりに感心する。ここまでは旅行者の体験とさほど変わりが無い。しかし帰宅した浅川を待ち受けていたのは同居する家族たちの問題で、朝鮮人の良き隣人たろうとする浅川は朝鮮人の面倒をよく見、それを楽しむ人であったが、それはしかし平穏な日々を意味するものではなかった。

六月四日 朝小雨が降ったが八時頃から晴れて城壁廻り。

午前八時頃貞洞へ行った。三枝君等はまだ起きたばかりの処だった。支度をせかせて家兄〔浅川伯教〕と三枝君と僕と三人西大門跡から踏み出して京城の旧城郭廻りにかかった。はじめに仁旺山に登った。山にはやや険阻の処もあったが、岩の上には大概足を掛ける踏み板が切ってあった。山上から京城市街を見下ろすと、ごみごみしてきたなく見えた。大地の皮膚病の様だ。人間等も寄生虫としか見えない。大地を支配している者とは見えない。西方の平原となだらかな丘陵北方の巍々たる男性的の連山を眺めていると、教会での牧師の苦しい泣言を聞くより真の言葉が響いて来る気がした。

北門を下りて一休し、夏蜜柑などを食べて白岳山〔北岳山〕に登った。僅かの険もあったが小道は続いていた。山頂で休んでまた眺めた。朝鮮人の学生等も二、三人いた。城外の農家も美しく見えた。東大門に下って付近の氷屋でビールとサイダーを飲んで

昼食をした。それから松の茂った淋しい道を城壁伝いに東大門に向った。東大門の近くは西洋人の土地になっていて鉄条網が張ってあって通れなかった。それから光熙門を過ぎて南山に登った。南山の薬水は美味だった。山頂にはケヤキやエンジュの大樹があって岱地になっていた。氷屋も店を出していた。冷しビール的一本を分けて飲んだ。少し下ると朝鮮神社の工事をしていた。美しい城壁は壊され、壮麗な門は取り除けられて、似つきもしない崇敬を強制する様な神社など巨額の金を費やして建てたりする役人等の腹がわからない。山上から眺めると景福宮内の新築庁舎など実に馬鹿らしくて腹が立つ。白岳や勤政殿や慶会楼や光化門の間に無理強情に割り込んで座り込んでいる処は如何にもずうずうしい。しかもそれ等の建物の調和を破っていかにも意地悪く見える。白岳の山のある間永久に日本人の恥をさらしている様にも見える。朝鮮神社も永久に日鮮両民族の融和を計る根本の力を有していないばかりか、これからまた問題の的にもなることであろう。山を下りて南大門に出て西大門跡から朝の発足点に戻って貞洞へ帰った。今日の遠足は愉快だった。道中は話しつづけた。芸術、宗教、教育、その他の諸問題は引き切りなしに出た。城壁廻りも今後何年かの後には出来なくなるだろう。今でさえ開かなくなったり、道が塞がれたりしたところが多い。それに城壁の完全に残っている部分は実に少ない。総督府は新しく下らないものを造るより城壁破壊の取締りでも考えそうのものだ。石材は盗み放題になっている。李朝の遺跡の湮滅をはかっているのでもあるまい。都市計画などする者はよろしく城壁廻りでもして山の上から大都市を見下ろして施策を案ずる用があると思う。隣家と五寸、一尺の境界争いをしている連中、もぐらの様に家のなかにばかり這入り込んで考えているのだからたまらない。

貞洞で晩飯をして三枝君を南大門駅へ送って夜は教会の音楽会へ行った。

景福宮内の新築庁舎とは建設中の総督府庁舎を指すが、「日本人の恥をさらしている様に見える」と浅川はいう。「朝鮮神社」には「美しい城壁は壊され、壮麗な門は取り除けられて、似つきもしない崇敬を強制する」の批判をする。後者の批判にはクリスチャン的視点が反映しているかもしれない。「山上から京城市街を見下ろすと、ごみごみしてきたなく見えた」という記述もある。

十月六日

水落山〔ソウル市の北方、議政府市、南揚州市との境界にある〕

(略) 九時何分発の咸興行列車に乗って倉洞で下りた。黄ばみかけた田圃中の小径を曲り曲って仏岩山と水落山の間を目がけて進んだ。麓の村には日本人の農夫の家も三、四軒あって、早生稲を刈り乾している女や畑打ちをしている男もあった。朝鮮人と一緒になって働いておる群もあったが。京城付近で見る様に日本人がいやに威張る振りが無いので気持よかった。兎に角一緒になって働く場合は日本人が監督振って惰けているのが例だのに。

少し行くと砂ばかりの川原があってその両側には若い櫟林がある。朝鮮女の群が頭に大きな石を載せて拾った団栗を袴の裳に包んでぞろぞろ歩いている。頭上の石は木の幹をそれで叩いてその振動で実を落とすためなのだ。そのため団栗のなる木は毎年

石で打たれるのでどの木もどの木も地上三、四尺の部分に負傷してたんこぶこしらになったり、よじれたりしている。女達は拾って行った団栗でこんにゃくこしらの様なものを拵えて食うのだ。また山奥へ行くと団栗を煤すすで、乾して置いて冬中飯に炊いて食うこともする。道端ならかしわにあった檜かざの木に千龍せんりゆうが上あがってゆさ振ふったら、ぼたぼた落ちた。通りがかった婆さんが頼みもしないのに拾って手伝てづって呉くれて行った。婆さんは孫らしい三、四才さいの女の子を連れていた。婆さんが団栗を拾うためにかがんだ時腰こしに提ひげている巾着きんちやくの紐ひもに真鍮製かざの鈎かぎ様の美しい形かたちのものがあつた。手すれた加減かへんが随分長年愛用あいようしているものらしい。問うたら煙管がんくびの雁首がんすいの掃除そうじをする道具どうぐだとのことだつた。

峠かほの城隍堂じやうげいどうの藪やぶで樺かほの種子たねを得て間村まむらという処ところに出た。川向うの林はやしの中に瓦葺かわらぶきが見えるから行って見たら小さい弥勒堂みらくであつた。こじんまりして感じのいい建物たてだつた。焼物やきものの水入みづいれの様に一つぼつりまとまっていた。檜かざとシベリアハンノキしべりあの多い山麓さんろくの斜面さへんを登のぼって行きながら檜かざや檜類かざるいの実みを採とつた。小春日こはるひ和わでぽかぽか暖かすぎたが山脈さんみやくの背せに出たら風かぜもあつて涼すずしかった。見晴みはらしもよかつた。道端みちのへに変わった焼物やきものの破片くずが一つあつた。はてなこの辺あたりに窯場かまばはないかなと四方しやうほうを眺め廻まわすと、右手みぎての斜面さへんに白い破片くずの斑まだらが見えた。しめた！ と独語ひとりごとしながら走はって行いったら矢張り例たとへの三島手さんじまての窯跡かまあとの一つらしい。話わで聞きいたりこの間人夫まにんぷを傭やとって取り寄せた窯跡かまあとは仏岩山ぶつがんと記憶きおくしておるが、もしやその窯跡かまあとではないかと思おもつたりした。直ぐその上に寺てらがあるのでそこまで行いったら判明はんめいすると思おもつた。禿山かぶの中腹なかつらに水みづの流ながれる溪たにもあつて付近きんには(略)、白楊しろやうなども茂さかつていて建物たては割合わりあに大きおほく確たしかかり出来できていた。突当つりに横額よこがくが掛かかつていて鶴林庵つるのりんとあつた。前まへに人夫まにんぷを寄越よこした窯跡かまあとは黄二庵わうにという処ところだと聞きいた。それを朝鮮音ちやうしんおんで何度も読よんで見たら似にているので或いかひは同じ処ところの様ような気がしてならなかつた。多分たぶんそうだろう。

窯場かまばらしいところの横手よこてには家の跡あとらしい礎石いしがあつて燔造はんぞう当時の建物たての跡あとらしい。破片くずを見ると味あじのある轆轤ろくろ跡あとに白絵土しろえつちを象嵌そうがんしたり菊花模様きくはなの押型おしがたに白絵しろえを入いれたりしたものものが普通ふつうで、地色ぢしきは鼠色ねずみいろで高台たかだいの外そとに五徳ごとく跡あとがある。

寺てらには誰もいいなかつたので窯跡かまあとの話わを聞きくことも出来できなかつた。ただ子猫こねこが一匹ひとひきいて鳴なきながら懐なついて来きた。建物たては気持きもちのいい古い様式やうしきのものものらしかつた。住すんで見みたい誘惑ゆうわくをさえ感かじた。住職しゆしやくは物貫ものぬきいにでも里さとへ下くだって行いつたものものらしい。猫ねこは腹はらが空くういていると見みえて、追おつ払はつても、追おつ払はつても自分達みづかみに付き纏まとつた。食く事をことはじめたら狂気きやうきの如ごとくせがみついた。バタばたの付ついたパンぱんを遣やつたら鼠ねずみを捕とつた時ときの様ようにうなつて嘗かめていた。精進料理しやうじんりやうりの寺てらの生活くわつがは猫ねこには随分ずいぶんみじめなものものだろう同情どうじやうした。

食く事をこと済すまして裏山うらやまに登のぼつた。子猫こねこは数度かずど追おい返かへされてとうとう断念だんねんしたらしく怨めしうらめそうに自分達みづかみを見送みおくつた。山やまの上うへからの展望てんぼうはよかつた。西にしに道峰山みちのね、北漢山きたん、南山なんざんなどが一通りひととおりに見みえてその間に京城市街きやうしやうじの一部いちぶも見みえた。見渡みわたす限り禿山かぶで山やまの間まは黄色きやうしきに熟じやくした稲田いなでの象嵌そうがんになつている。峰伝ねのつたいに登のぼって水落山みづおちの頂上ちやうじやうに達たつしたのは午後二時頃ごごにじごころだつた。頂たかきから東ひがしを見みると光陵ひかりりやうの山々やまが手近てぢかに見みえて南みなみの方ほうには漢江かんがも光あつていた。

樹木じゆもくの茂さかつた東面とうめんの谷やを下くだつたら途中ちゆうちゆうから道みちを失うつて出鱈目でたらめに歩あいた。里さとに近ちかくなつてから芝刈しばりの男おとこに尋たずねて道みちが知しれた。麓ろくに僅すこか四戸しほばかりある小部せうぶ落らくがあつた。裏山うらやまの滝たきから樋ひを用もちいて灌漑かんがいする水田みづでんもあり、川端かわはたや家いへの背後せうごには栗林くりばやしもあり、田畑でんはたけの

畦畔には漆や楮も植えてある。何となく有福そうな村だ。胡麻塩頭を五分刈りにした五十格好の男がいたので村の話を探ねた。彼は年にも似ず日本語も少しは解していた。焼物の窯跡のことを探ねたら、「窯跡が何か知らないが前の山からも裏の山からも向こうの山からも焼物の破片は沢山出る」という。前の山へ行ってみると殆ど全山破片がちらばっている。破片の形や窯に用いた支えなどから考えても窯跡であったことは疑いないが、窯跡らしい部分が見つからなかった。不思議に思って探して廻る間に気がついた。それは山の頂きに近い処に両班のらしいやや大きい墓があることと、この山の向いに文石などを用いた立派な墓のあることである。窯場のある筈のこの山は向いにある大きい墓の大切な案山であるから墓の造られた後に窯を築く筈がない。その前に窯跡のあったのを墓の造営のために地均してしまっただけのものに決まっている。それで全山に破片がちらばっていて特に窯跡らしい処がなくなっているものと推断される。探し廻っている間に山麓の路傍に石碑があるのに気がついて行くと、李朝の大官李新道の墓であることが記されてある。そしてその碑は「崇禎紀元後百八十七年甲戌八月□日立」としてある。その年は西紀千八百十四年朝鮮純祖十四年に当たる。窯は兎も角それ以前のものであるとして百余年前になる。どれだけ前かは予断出来ない。

破片によると白絵土を釉薬の下に塗った一種珍しい手法に依っている。地色は青磁系統のもので鼠色のものが多く、普通は内面だけに具合よく白絵土を施している。主に鉢や皿が多くて高台にも釉薬のかかったものが多い。五徳跡が概して高台の外についているのも珍しい式である。

村の入口に庭石と呼ばれている上面の広く平らな大石があつてその上に村人が集まっていた。夏の夜などこの村の人は多分こうしてこの石の上に寄り集まって涼みながら話すことだろうと想像される。

自分達もその石の上に上つてこの村についての話しを聞いたり村の人が拾い集めて置いた団栗の実を買ったりした。

その間に日が暮れかけた。若し自分一人の旅だったらこの村にでも泊まって外にも尚二つあるという窯跡を訪ねたかったのだが、公用の途中でもあり引率して行った者の手前もあるので少し遠慮して思い止まった。

宿と定めた興国寺に着いたのは七時頃だった。寺が建物の形や排置も美しく掃除もよくしてあった。境内には欒や榎や欒やあべまきや赤松の大樹が多く、大葉菩提樹もあった。案内された大雄殿の西隣の一棟は土塀が囲らされて小さく美しい門までついた一構であった。その門越しに伽藍の上に十六夜の円い月が出た時の美しさたら実に素敵だった。

夜は若い坊主等が遊びに来てこの山中の生活にも似つかない様の浮世話をしていた。

星加君等が相手になって話しているのを聞きながら眠ってしまった。

十二時頃咽喉が乾いて覚めて起きた。井戸端を探したが釣瓶がないので僧侶の住宅の付近を月の光で彷徨した。まだ起きている家も多かった。起きているのは多く女らしい。女の声で悲鳴をあげて喧嘩をしている家もあった。探し廻って離れた一軒家の側にある井戸で水は呑めた。

朝の四時から五時迄自分達の部屋の軒に吊つてある大鐘を叩いて若い僧はお経を上げた。乱打するので寝てもいられず一緒に縁先に出てこの日誌を書いた。

窯跡廻りについては日記よりも完成度の高いエッセイがいくつかある。それを引用することもできるが、日記にはやや不用意に書かれているがゆえに窺い知ることのできる作者の感情や息遣いというものがある、それがここでは貴重である。

鉾山診療記

1927年、長崎医科大を第一回生として卒業した^{はさまぶんいち}挟間文一（1898～1946）は薬理学教室に入り、1930年には同大助教授となる。挟間は薬理学研究室が英国から購入していた高価なケンブリッジ社製の弦線電流計を用いて生物電気の研究を始め、当時よく行われていた心臓ではなく、子宮を研究対象に選び、その動作電流の描写に成功し、その成果をドイツの一流科学誌等に掲載する。無名の一日本人薬理学者の論文は、意外にも学会で称賛を受け、多額の原稿料が雑誌社から送金されて来る。「日本では良い雑誌に論文を掲載するには、こちらから掲載料を支払わなければならないのに、独逸では全く正反対で先方から原稿料を貰おうとは、全く夢にも思わなかった。（略）不景気な当時としては九十五円という大金を受け取って私は、帰途にその内から玩具を買って、子供達を喜ばした」と挟間は記している（『我研究の発展』『朝鮮の自然と生活』東都書籍株式会社、1944年）。

生物電気の研究を始めて8年ほどが経過した2月のある日、挟間は突然学長に呼ばれ、京城医学専門学校に転任するように勧められる。長崎医科大で発覚した薬理学教授の博士号売買事件の責任をとって辞職した主任教授の後任となる京城医専の教授が挟間の留任を望まなかったため、挟間は半ば追われるように、赴任してきた教授の後任として京城に赴任することになったのである。

その時の心境を挟間は「昭和十年四月十五日波荒き玄海を渡って、半ば重苦しい半ば期待のこもる複雑な心を抱き、恐らく私の新たなる故郷となるであろう朝鮮へと向かった」と記している。「間もなく研究は軌道に乗って、昔日の如く私は生物電気の研究に邁進して行った」の記述もある（同上）。が、挟間はやがて朝鮮の自然や文化への関心を抱くようになり、路傍の雑草や発光動物や夜空の星や朝鮮の住居といった多様なテーマで「科学随筆」を記すようになる。紹介したいエッセイは多くがあるが、「歩く人」「動く人」をテーマにしたものというなら1930年代末以後、夏になると出かけていた鉾山労働者の衛生調査や診療のための巡回診療の日誌風エッセイが面白い。1943年6月2日から11日にかけて、朝鮮半島の北東、咸鏡道で行った巡回診療の記録であるが、類い稀な好奇心と観察力と文章力の調合した日誌である。

六月二日。鉾山連盟の委嘱を受けて、助手の^{あきもと}朱本君〔朝鮮人青年。後に薬理学教授となる〕を伴い、今度は北朝鮮の鉾山を診療することとなった。昨夜来少し下痢をして、相当身体が弱っておったが約束だから、意を決して十九時四十分の急行で京城駅を出発した。同行は鉾山連盟の美根氏と朱本君の二人。久しい間日照が続き非常に雨を待望しておったが、この日の夕方頃からぽつぽつ降り出し、蘇生の思いがした。この冬頃から北朝鮮は非常に発疹チフスと回歸熱が流行して戦々競々としておったが、産業戦士達の診療と衛生指導は国家的の要請であるから、勇を鼓してこの旅を決行したのであ

る。(略)

六月三日。終日曇りで時々小雨。咸興駅で目が醒めると、この町に開業の吉田君夫妻が迎えに来ておった。久闊を叙す。ここから咸鏡南道鉦山連盟の堀主事が同乗し、今度の旅行に行を共にする。咸興から端川の間は相当な降雨があって、農民達は昨年一昨年不作であったから、今年こそはと豊作を望んで雨の田圃に甲斐甲斐しく働いていた。十四時半頃端川駅に着いた。昨年も泊まったことのある香川旅館にちょっと休息して、汽車を待つ間に理髪した。私は京城にいれば、休日にも実験をやったり、書き物をしたりして、ほとんど髪をかる閑がないので、よく旅先の寸暇を利用して散髪する習慣がある。最近、どこも物資が不足しているので、旅先で市場に出掛けて、その物資の集散状態を見るのを楽しみにしておるが、端川でも御多聞に漏れずその状態を見ると、久しく口にしなかった胡麻が沢山あったので、一合四十五銭の公定価格で、五合程買う。割合魚が豊富で大きな塩鯖が一尾六銭、五寸ぐらいの小烏賊が一尾二銭で頗る安値、さすがに田舎はいいと思った。

十六時二十分の端川発古城行き列車に乗って宇部鉦山に向かう。この汽車は私鉄ではあるが、広軌だけに非常に乗心地がよい。例によって行儀の悪いオモ二連中が車中に沢山の荷物を持ち込むので、非常に不愉快であったが、朝鮮の何処にもある田舎風景であるから、これは辛抱しなければならぬ。沿線至る処、朝鮮葉師草の花盛り。その間に薄雪草が点々と咲いている。薄雪草は一種の高山植物であるが、平地の鉄道沿線にこの花があるとは、全く予期しなかった。私は旅行先でよく植物の分布を調べているが、これは名所旧跡を見るのと同じように、旅をする者にとって、慰安の一つである。汽車の沿線で偶然井戸端で犬を殺して料理している農民を見る。朝鮮では盛夏の候に犬を料理し、これを味噌汁にして食べる習慣がある。これを朝鮮語で「ケクック」と呼ぶ。盛夏になると脂物が足りなくなり身体が衰えるので、ビタミン補給の意味から犬を殺して食うのである。従って朝鮮では犬は一種の食料品で、以前は一匹二、三円で手に入れておったが、最近馬肉、牛肉、豚肉などの不足のため、犬の価格が一躍騰貴して、今では百円内外で取引されているそうである。それにしても時期が早すぎるから、ちょっと不思議に思われたが、北朝鮮では既に初夏になると、犬を食い始めるという。この犬料理は初めは臭くて吐き出しそうになるが、段々食べ馴れると幾分美味しいものだそうである。京城では「ケジャンクック」と言ってこれを専門に売っておる店がある。犬の汁は内地の土曜鱈に比すべきもので、農民は盛夏の精力消耗の場合に非常に喜んで食う習慣がある。私も何時かこの犬汁を味わってみたいと思っていたが、生憎車中のことで食うことができなかったのは遺憾であった。

鉄道沿線を見ると、山の中腹を焼き払って沢山馬鈴薯を作っている。以前は火田民のみがこの奪掠農法をやっていたが、食料不足の近來は火田民でなくとも普通の農民もやっている。以前は営林署の役人がこれを非常に喧しく言っておったが、近來は食糧増産の見地から大目に見ておるばかりか、所によっては却って奨励している処もあるそうである。現に山の坑夫達が、休みの日に一里、二里の道を通しとせず、山に出掛け木を焼き払って跡に沢山馬鈴薯を作っている。そのためか、昨年に較べて今年は馬鈴薯が二、三割増収であると言う。実際農民にとって馬鈴薯ほどいい食糧はない。

愈々十九時に古城駅に下車。これから一行は鉦山のトラックに乗り、川に沿って約三

里の道を山に向かう。この溪谷にも御多間^{たちま}に漏れず火田民の作ってある馬鈴薯畑が沢山ある。若しこの夏に大水でも出たら、忽ち下流の美田が流されるのではないかと、不安がつのる。段々山に這入ると、気候がずっと遅れて、今丁度ライラックの花盛り。夕方鉦山に着きその夜は早く床に就く。

六月四日。朝から晴天で、朝は相当寒かった。九時から愈々山^{いよいよ}の病院で診療を開始した。この宇部鉦山は硫化鉄の山で、これを原料にして硫安肥料を造るそうである。増産に人造肥料の必要であることは言うまでもない。そこで、山は時局の切なる要望に応えて一生懸命増産しているのである。前もって我々の来ることを宣伝しておったから、患者が朝から六、七十名も詰め掛けておった。この山は開いてまだ日が浅く、大きな病院の建物はあるけれども、医者が一人もいない。ただ非医者が一人いて診療をやっているが、この人に山の人々の生命を託することは甚だ覚束ないといって我々の来山を非常に喜び、信原所長夫妻は歓待至らざるなしという状態であった。山の患者を診ると、労務者の中には胃腸病が多く、特別な病気はない。その家族達を診察すると、この頃は食糧の不足と見えて、ビタミン欠乏症が非常に多い。特に乳児の角膜乾燥症、角膜軟化症が少なくない。これは、栄養不足から起こる病気で初め親達は気付かないけれども、段々眼の表面が白くなって中から虹彩が脱出するのに気が付いた時には、もう手遅れになっている。麻疹とか百日咳とかの栄養不足の時によくこの病気が起こり勝ちで、漸くその栄養障碍が治って一命だけはとりとめたと思う頃には、もはや失明している。この眼病は、朝鮮の赤ん坊の失明原因の首位を占めている。栄養知識の発達した文化圏には殆ど見られない現象である。次に幼い子供の慢性中耳炎が非常に多い。所謂耳^{いみゆる}だれで、始終耳^{うみ}から膿^{うみ}が出ている。これは衛生^{ふゆきとどけ}の不行届のために急性の中耳炎を起こした時に治療を誤ったために遂に慢性に陥ったのである。

(略)

この山から出るのは硫化鉄であるが、この硫化鉄には黄鉄鋼、白鉄鋼、磁鉄鋼の三種があって、黄鉄鋼は黄銅鋼と区別がむずかしい。私は一昨年鉦山の診療^{たびごと}を始めて以来、専門ではないが、鉦石のことに非常に興味を感じて山に這入った度毎に専門家に話を聞き、この頃は幾らか鉦石に関する知識が付いた。この山の鉦石には硫化鉄が約四二%も含まれているだけに、非常に有望視されているという。ここの硫化鉄は日室工場に運ばれて、それから硫安を造ることになっている。

その晩、山の人を集めて、鉦山の衛生に関する講演を二時間ばかりやった。何時も朝鮮の鉦山で問題になるのは労務者の入浴問題である。元来朝鮮の人は余り入浴を好まないが、そのために皮膚病が出たり、回帰熱や発疹チフスが出るので山では風呂を作って半ば強制的に入れているが、入浴に対する伝統がないので、裸^{ままた}の儘、甚だしきは鞋を履いた儘湯に這入ったりし、その上、湯を乱雑に使っているそうである。山の人のお話によると、入浴者を調べたところが、一日二百人位はいつでも驚いた事には、その中の八〇%迄も子供が占めておったということである。これを見てもまだまだ朝鮮の大人には身体を清めるという習慣が非常に欠けていることが分かる。我々は一日も早く朝鮮の人々に、入浴に依る喜びと、これに依る衛生知識を普及したいものであることを痛切に感じた。

夕方社宅の人々の健康診断をやったが、非常に妊娠が多い。これは「生めよ、殖^{ふや}せよ」

の国策に副^そう微笑ましい現象である。(「北鮮鉱山診療記」『朝鮮の自然と生活』94～101頁)。

この魅力的な紀行文を記した挟間文一はこの本が刊行された翌年、急性肺結核に感染し、1946年1月に死去する。挟間文一は多くの旅をし、仕事をし、戦時期には巡回診療のようなことまでしたが、調査や仕事を丹念にこなすだけでなく、面白い人間に出合うとすぐ質問をしてそれをノートに記し、後に整理してエッセイを記すということをした。友人たちは挟間を「精力的」な人と見做していたようであるが、無理をしていたのだろう。鉱山診療記にもそれを窺わせる記述がときにある。

挟間が残した三冊の「科学随筆」には朝鮮をテーマにした作品が多くあり、紀行文やエッセイとして読んで魅力的なものもある。にもかかわらず、その作品に言及されるということはこれまでなかったのはなぜなのだろうか。と思っていたところに、挟間が1938年のノーベル生理学・医学賞候補に推薦されていたことを岡本拓司の論考(「平成期の日本のノーベル賞受賞者」『日本物理学会誌』vol.74, No.5, 2019)で知り、少し衝撃を覚えた。自身が卒業した長崎医科大学の後輩である下村修^{しもむらおさむ}(1928～2018)がやがて発光生物の研究でノーベル化学賞を受賞したというニュースを挟間が耳にしたら、どんな感慨を抱いたであろうかと岡本はいう。挟間は発光生物に関心を寄せる偉大な先輩であった。